

PART 1 . 少年時代 祖母から叩き込まれた行動原則

僕は、人から「右」と言われたら「絶対左へ行け」という、ヘソ曲がりの家に育った。

九十九才まで生きた祖母は明治十五年生まれ、鹿児島生まれの侍の娘だった

子供のころ、祖母に連れられて満員の日比谷の映画館に入り、モギリが「右にどうぞ」と言ったとたん、祖母は僕の手を引っ張り、制止を無視してトットと左に回る。それで不思議なことに、いつもかなりの確率で席に座ることが出来た。

「オマワリの言うことを鵜呑みにしちゃ、イケマセン」「有象無象（うぞうむぞう・群集）のあとついて行っちゃいけないですよ」それが口癖。東京の大地震の時、周りの建物が崩れ落ちる中、警官の公園に行けと言う指示に逆らい、円タクの運転士に大金を掴ませて、幼かった父を連れて無事高輪の自宅に戻ってきた。東京の大空襲の時も、何度も自分の「勘」を頼りに爆弾の落ちる中を生き延びてきた。だから、彼女の「勘」も、ヘソ曲がりの「反骨精神」も、ホンモノの筋金入りだ。

彼女の叔父や親戚筋には北里柴三郎、徳富蘇峰、蘆花など、明治の時代を作った人間たちがごろごろいた。その中で育った彼女自身、幕末のサムライ魂と、明治西洋の啓蒙思想をごちゃ混ぜにした強烈な個性の持ち主だった。僕は毎朝「少年易老学難成一瞬光陰不可軽」など意味の分からない漢文の習字をさせられ、「自尊心」を忘れるなどが、エジソンやリンカーンの話などを聞かされた。彼女自身若いときは医学を志していたが、日露戦争の終わりの三十の時、看護をしていた神戸の病院に、指を飛ばして入院してきた二十のハンサムな騎兵と恋に落ち、医師の道を捨てた。そうして生まれたのが、僕のオヤジだ。

オヤジは兵隊の時、ソ連と満州の国境線で終戦を迎え、現地で武装解除を受けろという命令に逆らって、列車を確保し安全な朝鮮まで逃げ延びた。民間人を置き去りにして卑怯モノともいわれたが、前線に残った兵隊たちは、全て酷寒のシベリア送り、何年もの強制労働に、多くの人が命を落とした。大地震、大空襲、国が滅びるとき、それに、時代が変わるとき、常識も権威も、意味を失う。

最後に自分を守るものは、自分でしかない。

いずれにしても、祖母と父のヘソ曲がりの精神と強烈な自己保存本能、人からなんと言われようとも、権威を疑い、独自の判断で行動する行動力、そのお陰で、僕はこの世に生まれたことになる。「何でも自分の頭で考える」「人の後をついていかない」子供の時から仕込まれた教訓は、その後出会った「禅」と共に、僕の人生の全ての基本になった。